

アメリカにおける美術教育アセスメントの事例研究

ふじえみつる

美術教育講座

A Case study of Arts Education Assessment in the U.S.

Mitsuru FUJIE

Department of Art Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

はじめに

平成元年(1989)に「新しい学力観」にもとづく学習指導要領が告示されて以来,その「ゆとり教育」が学力低下を生んだという批判がある。その批判の動きは,2003年のPISA調査での結果をうけて加速した。既に,2000年の文科省・教育課程審議会で全国的な学力調査の実施が議論されていたが,2007年には国語と算数・数学について全国的な悉皆調査を行うことが決定された。¹学力調査の対象教科を今後はさらに広げていくことが予定されている。芸術関連教科に関しては,補完的な調査以外にも学力調査が行われるどうかは現時点では不明である。

そうした背景をふまえて,ここでは,「図工・美術科」に関するアメリカ合衆国(以下,「アメリカ」,または「米国」)の事例を検討していく。その理由は,現在のわが国の教育改革が,PISA調査で焦点化された「コンピテンシー」を重視しながら,アメリカの競争主義・市場原理を導入していく方向にあり,学力調査(アセスメント)²の目的・方法においてはアメリカ型がモデルになるであろうと想定されるからである。今後,わが国で,全教科に関して学力調査を行う方向が出されるようなことになれば,芸術教科に関しても,全国一律の問題や数値化できる「学力」をどのように想定し,調査するのかの議論が必要となってくる。また,そうした調査を実施した場合のメリットと同時にデメリットを明らかにしておく必要もある。もし,実施するとしても,そうしたデメリットを極力避けるようにすることが求められる。そのためにも,アメリカで実施された美術科関連科目に関する学力調査の事例を研究しておくことが必要である。

2. 全米学力調査の背景

“Nation at Risk”(1983)以来のアメリカでの教育改革は,党派を超えて,経済戦争に勝つための国民全体の基礎学力を高めるという点で一貫してきた。³

“Goals 2000: Educate America”法(1993年施行)で芸術教科(美術,音楽,ダンス,演劇)⁴も含むいくつかの教科が2000年までに公立学校において必修化されるべきだとされ,同時に,全米共通教育「基準」(standards)に基づいた当該教科に関する学力調査の実施も宣言された。⁵学力調査を進める行政組織としては,連邦教育省の「全米教育統計センター(NCES)」の監督のもとに,「全米教育評価委員会(NAEP)」が調査の内容や方法を具体化し,民間調査会社に依頼する形をとっている。調査の結果は「国民の成績表(Nation's Report Card)」として公表される。さらに,現ブッシュ大統領が署名した“NCLB(No Child Left Behind)”法(2001)は,連邦政府主体で財政面でも,より強力に改革を進めようとするものである。それに対しては「テストのために教育する」という批判も出ている。⁶

以上のような背景から,「全米美術教育基準(National Visual Arts Standards)」が成立してきた。その基準は,「内容基準」とその達成度を系統的に記述した「達成基準」から成る。その考察から,ここでは「子ども中心」から「教科中心」への転換がみられることを指摘した。⁷また,1997年に実施された全米規模の芸術教科学力調査についても,美術の事例を中心にその経過と結果を検討した。⁸ここでは,全米規模の調査実施の行政措置や手続きなどの確認が中心となり,具体的なアセスメントの事例については1件しか検討できなかった。本論では,財政上の理由で実施されなかった学年に関してもいくつかの事例をとりあげ,その問題内容,採点基準などを検討していく。以下の“Nation's Report Card”に関する説明は,NAEPがサイトに公表した資料による。⁹

3. 全米美術教育調査の概要

調査実施の具体的な方法は,1994年に「全米教育評価審議会(NAGB)」より公表された“Arts Education Assessment Framework”に示されている。¹⁰この調査実

施要項ともいべきフレームワークに基づいて、1997年の芸術教科の調査のためのテストが、第4、8、12学年の3学年分が試作された。この4-8-12という学年区分は、全米教育基準が想定しているプライマリー（エレメンタリー）スクール ミドルスクール ハイスクールの4 4 4学年制の最終学年に対応している。

芸術教科に関するNAEPの調査は、1995年に第4、第8学年で4領域（音楽、美術、ダンス、演劇）すべてについて試験調査（field test）が実施され、項目や質問内容の見直しがなされた。その試験調査によって、演劇とダンスを受講している生徒はごく少数であることがわかったので、これらの領域に関しては、的を絞った（targeted）サンプルに限定して調査することになった。しかし、1997年の本調査（operational assessment）では、財政上の理由で第8学年のみを本調査することになり、第12学年分は試験調査にとどめた。ただ、第8学年でも、ダンスは1セミナーで17時間以上の受講生がいないため本調査はできずに試験調査にとどめたとされる。¹¹

学力調査の前提としては、全米芸術教育基準にもとづき各州レベルで定めた州基準があり、さらにそれに基づいて定められた各学区（school districts）や学校単位の教育課程があり、さらにそこで当該の芸術領域が開設され受講生がいることが必要である。演劇とダンスについては、この条件が十分に満たされなかったということで、今後の課題とされた。

以後は、美術教育に限定して述べていく。美術教育に関係する教科名は、全米基準やNAEPでは“Visual Arts”を使用しているが、州によっては異なる。¹²

4. 全米美術教育調査の内容構成

1997年に実施された第8学年対象の調査では、問題は7つのブロックに分けられている。本調査されなかった第4学年では「タイムカプセル」と「モニュメント」、第12学年では「版画制作（print making）」と「モニュメント」のブロックが試験調査に使われた事例として公表されている。その事例のうち、第8学年の「コラージュ」ブロックについては既に具体的な内容を検討した。¹³本論では、第8学年の「自画像」と第4学年の「タイムカプセル」と「モニュメント」の三つの事例を検討していくが、その前に、アセスメントの対象となる美術活動プロセスの分野（表1）と各ブロックに共通する設問の種類（表2）と、それぞれの設問に対応する採点基準と結びついた評定段階の区分（表3）について確認しておきたい。

表1は活動プロセスにおける「創作」と「反応・鑑賞」の具体的な内容を示したものである。「創作」は各ブロック1～2問しかなく、「反応・鑑賞」を文章で回答する設問が圧倒的に多い。

表1 美術活動におけるアセスメントの分野

美術活動のプロセス (Arts Process for the Visual Arts)	
創作 Creating	生徒は作品を創作するときに、以下のことがらを明確にし、発明し、選択し、再現し、反映する。→主題、状況理解、空間・時間の概念、技法、アイデア、制作過程と作品との関係など。
反応 Responding	生徒は次のことがらを、記述し、分析し、解釈し、評価し、細分化し、応用する。→内容、形式、コンテキスト、形と機能との関係、態度や予備知識、自分の信念など

表2 設問の種類

設問の形式	設問の内容
Multiple choice	択一問題
Short-constructed response	指定された項目に対して簡条書き、または短文で答える。
Extended-constructed response	指定された項目に対して、やや長めの文章で答える。
Observation + interpretation	作品を観察し分析しながら、自分の解釈を加えて長文で答える。
Creating	与えられた課題、時間内で条件に合う作品を制作する。
Self-evaluation	自分の作品に対する自己評価文を書く。

表3 「評定」の段階数

タイプIII	タイプIV	タイプV	段階
		Effective	5 秀
	Sufficient Complete Extensive	Adequate	4 優
Acceptable	Uneven Essential	Uneven	3 良
Partial	Minimal Partial	Minimal	2 可
Unacceptable	Insufficient Unacceptable	Unacceptable	1 不可

「評定」(表3)は、3段階のタイプ、4段階のタイプ、5段階のタイプの3種類がある。4段階の項目名は多種の組み合わせ方があり、適用される設問の種類も異なっている。タイプは主に短文回答形式に、タイプは「創作」の評価に適用されることが多い。「秀」から「不可」までの訳語を当ててはみたが数字で示すほうが理解しやすいと思う。

調査に要する時間は学年や内容によって異なるが、各ブロックで大体、50分から70分くらいである。¹⁴出題方法は、監督者の口頭による指示、冊子に印刷された指示文を自分で読む、事前練習用ビデオを見る、問題文を朗読録音したテープをカセットラジオで聴く、そして、それらの組み合わせなどさまざまである。

材料もまったく使いこなせないとコメントされる。また、図3は、線の勢いや陰影はない、シーレの作品を見て画用紙におさめようとしている、自分を具体的に観察した形跡はない、材料の使い方も未熟である、色彩は魅力がある、とコメントされる。

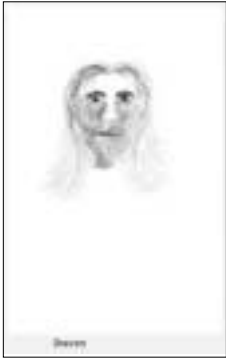


図4 「3」の作例



図5 「4」の作例

図4は、顔の色を塗り分けることで象徴的な内容を示しているが作者のメッセージを伝えるには技術が欠けているとされる。図5は、最優秀の作例の一つであり、簡潔で表情のある線を用い、シーレがしたように自画像の意味ある部分を強調するために色彩を強調しているとされる。カラー図版で見ると唇がシーレのように赤く彩色されている。

こうした作品の評価の後で、さらに、自分の作品について文章で説明する設問が続く。

設問6-2-1(制作意図の説明)あなたの描いた絵で、何を伝えなかった説明しなさい。

設問6-2-2(制作の自己評価)あなたらしさ(personality)を伝える自画像に関して、少なくとも、三つの特徴を論じなさい。また、その特徴を表すためにコンテやパスなどの材料をどのように使ったかを述べなさい。

この設問では生徒が自身で創作した作品に関する意図と自己評価について判定され、生徒は、その知識や技能を明確に実証するために、自分の作品を反省と創作(reflection and creation)の長いプロセスの一部として評価する必要がある。結果として、よい創作作品がいつでも、よい説明(書き方)とは対応していることはない。評定は、タイプで「4」が10%、「3」が24%、「2」が19%、「1」が47%であった。「創作」の評定は正常分布に近いが、評論文ともいべきこの設問6-2では、最低の「1」が47%で、「2」が「3」より少なく二極化の傾向がある。

評定「4」を獲得したギタリストの自画像を描いた生徒は、設問6-2-1に対して「自分はおとなしいが、ワイルドであることを示したかった」、設問6-2-2に対して「自分をギタリストの姿に表した、僕は自分の好きな楽器、ギターを抱えて演奏してい

る、僕の髪はボサボサだが、気にしていない」と解答しているが、特に材料には触れていない。

文章での解答の採点のための基準(ルーブリック)として、300点満点で上中下の3段階に分けて、35項目が示されている。¹⁸この「自画像」ブロックに関しては、「上」では、(273点)コルヴィッツとシーレの技法上の類似点について確認する、(222点)自分について何かを伝える自画像の三つの特徴を説明する(189点)シーレの自画像について、様式、線、色彩を観察して筋の通った解釈をする、(181点)コルヴィッツの自画像における木炭について2つの特徴を説明する、があげられている。「中」では、(162点)自分について何かを伝える自身の自画像の1つの面を説明する、(141点)コルヴィッツの自画像における木炭について1つの特徴を説明する、「下」では、(107点)様式、線、色彩に関して、シーレの自画像が伝えようとしている1つの特徴を説明する、が示されている。こうしたルーブリックは必要だとしても、実際には事例で示されている生徒の解答例だけでも多様であり、「創作」と同様に文章表現による解答の採点にかかる時間、客観性の確立など課題は多い。

6. 第4学年「タイムカプセル」ブロック

第4学年のアセスメントは、既に述べたように1997年に本調査はされなかったが、1995年に試験調査が行われている。第8学年の「自画像」の例でみてきたように、この全米調査は、創作活動以外には文章で解答する設問が多い。中学2年相当の第8学年なら、多くの生徒がそれなりに文章を書くこともできる。

しかし、小学校4年生の場合は、別の工夫が必要となる。試験調査だけなので、採点結果は出ていないが、次に第4学年の「タイムカプセル」と「モニュメント」の2つのブロックについて検討してみよう。

「タイムカプセル」ブロックの趣旨は「生徒は、視覚文化の価値、社会的な状況との関連性に関する知識や理解を示すために、視覚的なシンボルを分析し作成すること」とされ、設問は10題ある。準備は問題冊子と2Bの鉛筆のみで、時間は30分とされる。監督者が問題冊子の内容を説明しながら解答者自身が問題文を読むという形で進められる。冊子の冒頭で、信号機の赤がストップを意味するシンボルであることが説明される。

設問1 次のどれが「愛国主義(国へ尽くす気持ち)」のシンボルとして使われますか?(図6)

設問2 文化によってシンボルは異なるが共通しているものもあります。次のどれが多くの文化に通用するものですか?(図7)

設問3 ライオンは「勇気」のシンボルとして使われます。次のAからDのうち、どれがはっきりと「勇気」を表していますか?一つ選んで、なぜ、それを選

んだか説明しなさい。(図8)(文5行分スペース)
 評定は、タイプ で正解(A)を選択して理由が書ければ「3」、選択肢は合っても理由が書けなければ「2」、選択肢を間違えれば「1」になる。

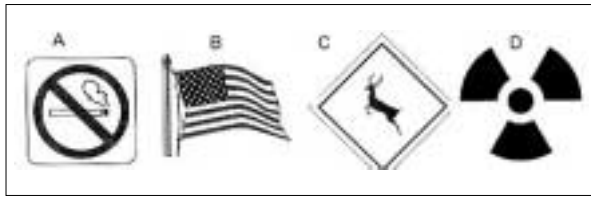


図6 設問1「愛国主義」のシンボル

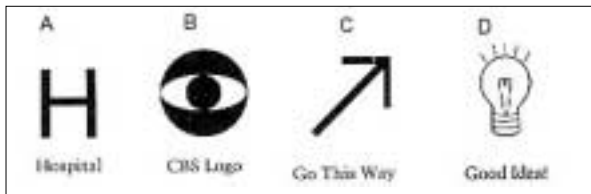


図7 設問2 異なる文化に共通するシンボル

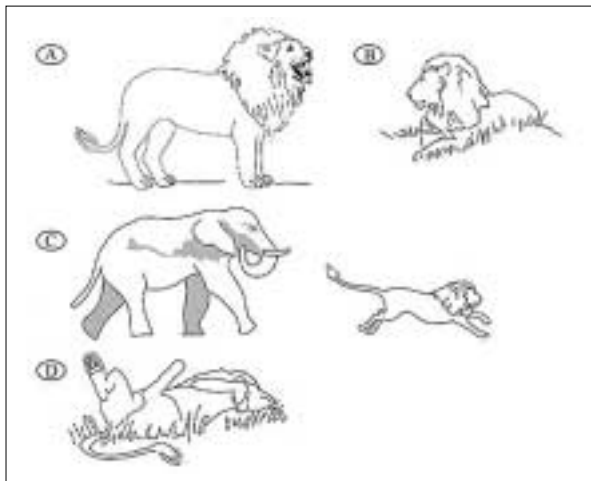


図8 設問3「勇気」のシンボル

設問4 あるシンボルは私たちがどのようにふるまうかについて指示を出します。次のメッセージに当てはまるシンボルをA～Eから選びなさい。
 「 」ごきげんよう! 「 」泳いではいけません!
 「 」毒,危険 「 」ここから切る
 「 」ゴミを捨てるな

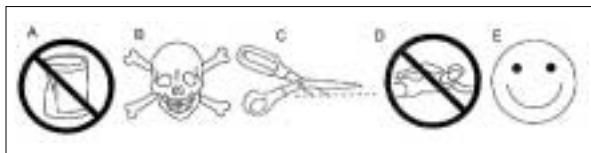


図9 設問4メッセージを伝えるシンボル

設問4の評定は、タイプ で5問正解なら「3」、2問正解なら「2」、一つ以下なら「1」になる。

設問5 あなたはタイムカプセルに4年生の元気な

姿のシンボルを描きます。次のA～Dのうち、どれがピッタリしていますか?それを選んだ理由も説明して下さい。(文5行分スペース) 評定はタイプ で、BかCを選んで「この女の子、元気に走っているから」とか「4年生は学校でやることがたくさんあって忙しいから」などの理由が書ければ「3」、BかCを選んでも理由がうまく書けないときは「2」、BかCを選ばなかったときは「1」になる。

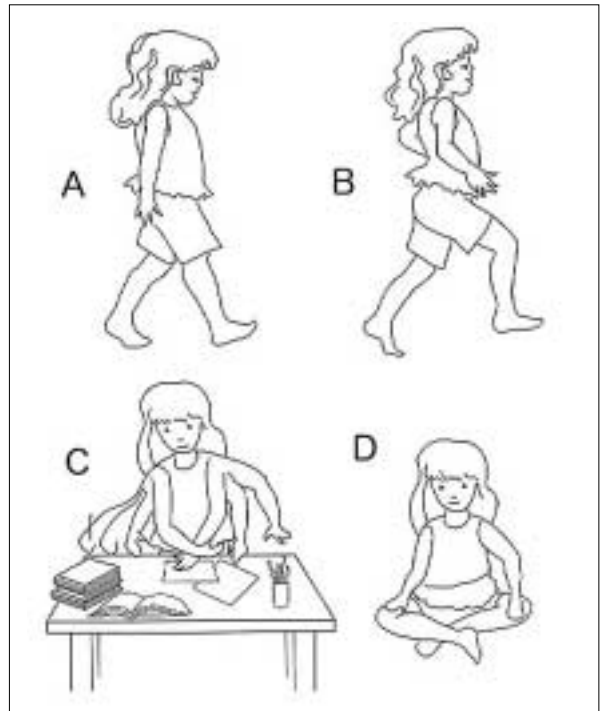


図10 設問5 元気な4年生

設問6(創作) 今から1000年後に開けられるタイムカプセルに音楽CDを入れても、それを再生する方法があるかどうか分からないので、あなたの好きな曲を絵に描いてしまっておこう。どんな種類の曲が書いて下さい。ただ、絵の中には文字をいっさい使わないようにして下さい。(空白のボックスあり) 描いた後で、あなたの使ったシンボルがその曲をどのように表しているかこまかく説明しなさい。あなたの描いた絵と説明がかならず合うようにして下さい。

創作活動の評定はタイプ で、「4」は何かを聴いているところとどんな曲かがはっきりとわかるもので、音に向けられた大きな耳、楽譜が飛び出してくるラジオ、ロックンロールによって踊る人などが描いてあるもの、「3」は曲を聴いているところかどんな曲かのどちらかがわかるもの、「2」は上のどちらかを表そうとはしているが弱いもの、「1」はどちらも描いてなくて、求められたものに何ら応じてないものとされる。また、自作の説明の評定はタイプ で、「3」はその絵がどのように曲を表しているかを十分に説明しているもの、「2」は説明が一般的でそのシンボルの働きを十分説明できないもの、「1」はシンボルの働きに関して何

の説明も無いものとされる。

設問7 いろいろな物がシンボルになります。今の4年生にとって、ぴったりのシンボルとなるのはどんな物だと思いますか？その名前を書いて下さい。なぜ、それがピッタリのシンボルだと思いましたか？その理由を説明して下さい（文5行分スペース） 評定はタイプ で、「3」は物の名前をあげて、それを選んだ理由も明確なもの、「2」は物の名前をあげられても、それを選んだ理由がはっきりしないもの、「1」は物の名前が言えないものとされる。

設問8 4年生の生活について何かを人々に伝えるために想像力を働かしてシンボルをつくりましょう。想像だけでつくりあげて下さい。4年生にとって大切なもので、多くの人たちが見ただけでわかるようにすることを忘れないようにして下さい。（空白ボックス）次にそれが何のシンボルかを説明し（3行分スペース）、さらに、あなたのつくったシンボルが、なぜ、人々に4年生について語るのにぴったりかの説明をして下さい。（3行分スペース） 評定はタイプ で、「3」は見ただけでわかるもの、「2」は説明があつてわかるもの、「1」はただの人物とか笑顔を描いただけで説明の無いものとされる。

設問9 タイムカプセルでは、あるものが、人々が日常していることのシンボルになるでしょう。というのは1000年後にはどんな言葉が話されているかもわからないので、絵がコミュニケーションのよい方法になるでしょう。次のAかBのどちらかを選んで、何か日常の仕事の一つを順を追って段階別に、5分以内で線だけの絵で描きなさい。Aは「ピーナッツバター入りゼリーサンドウィッチを作る」、Bは「照明器具の電球をとりかえる」。（空白ボックス） 評定はタイプ で、「3」は仕事の内容を明確に順を追って図示しているもの、「2」は仕事を図示しようとはしているが、ある場面が欠けていたり他の場面と似すぎているもの、「1」は仕事を順番に描いてなくサンドウィッチとか電球だけを描いているものとされる。

この課題を5分以内にこなしていくのは小学校4年生にとってかなり難しいのではなからうか。

設問10 1000年後の人々のためにタイムカプセルは埋められます。大きな石を使ってそのカプセルが何であり、どこに埋められているかがわかるようにしてみましょう。1000年後の人々がわかるように、その石に、そのカプセルがなんであるか、そのカプセルが地面から4フィート下に埋まっていることを伝える絵を彫りましょう。下の空白に彫りこむものを描きましょう。ただし、言葉を使ってはいけません。（空白ボックス） 評定はタイプ で、「3」はカプセルが何か、場所はどこかがはっきりわかり、解釈も容易にできるようにデザインされているものなど、「2」はカプセルの中身、または場所のどちらかがわかるがシンボルが不

明確で言葉が混合されているものなど、「1」は絵が理解できないものとか伝えるべき情報として適切でないもの、単語だけが描いてあるものなどとされる。

7. 第4学年「モニュメント」ブロック

このブロックの趣旨は、生徒が美的な概念や社会的な状況の理解を表すためにモニュメントのモデルを創作することにある。そうすることで生徒は、視覚的・空間的な概念を活用する方法を発明し、モニュメントの意味と機能とに合ったよさを達成できる材料を選択し使用するようになることとされる。ただ、準備物はかなり多く、問題冊子と筆記用具の他、紙工作セット一式、ドライヤー、カセットプレイヤー、ポラロイドカメラ、接写レンズ等がある。また、進行用テープ（Paced Audiotape）があり、問題文を読み上げ、作業時間中は無音で進み、55分間のペースを指示するという。また、試験場の机の幅はできれば個人で92cmはほしいとされる。このブロックは全米での本調査をするとなると材料費もさることながら、監督者やその補助者、採点用資料の作成費、人件費など含めてかなりの経費がかかることが予想される。



図11 「モニュメント」ブロック関連図版

- 1：リンカーン記念堂，2：自由の女神像，
3：ベトナム戦争従軍碑，4：エッフェル塔

問題冊子の最初に「建築家（Architect）」とは何かの説明があり、ここの課題では、あなたは建築家のように考えることが求められると述べられている。

設問1（練習問題）次の3種類の建物について外から見てそれとわかる特徴を言いなさい。時間は4分。消防署，単身者用住宅，宗教的な儀式の場所。これは練習問題（warm-up）だから採点されない。

設問2 モニュメントは、重要な人物、アイデア、事件を人々が称賛し思い出すためのものであることが

説明され、問題冊子に4点のモニュメントの写真(図11)が示される。そこでは、モニュメントが何を伝えようとしているのかを考え、人々が近づいたり通り抜けたりできるようなデザインを見るように指示される。そして、国際児童年を記念するモニュメントをデザインし、中を通り抜けてきて、子ども・たくさんの国・フェスティバルのアイデアが伝わるように求められる。それから準備された材料をチェックして、それらを使ったモデルのアイデア・スケッチをする。

設問2には順次行うべき多様な活動が組み込まれているので、評定の観点(scoring guide)も三つに分かれる。観点1はタイプで「材料に合ったデザインかどうか」で評定する。観点2はタイプで「建物内を人々が通り抜けできるかどうか」で評定する。観点3はタイプで「子ども・国・フェスティバルに関するアイデアを伝達できるかどうか」で評定する。

設問3 あなたがデザインしたモニュメントのモデルを作りましょう。スケッチをもとにしますが、スケッチ通りでなくてもかまいません。厚紙と粘土を上手に使い45分間で完成して下さい。評定は、設問2と同様に3つの観点からなされる。設問3は立体モデルに関して、設問2のアイデアスケッチに関してとほぼ同じ観点から評定をしている。

設問4 あなたの作った建築モデルをよく観察して、人々が通り抜けできるかどうかを想像してみましょう。そこを通り抜ける人々に「国際児童年」について考えさせるような3つの特徴について話し合いなさい。あなたが確かめたそれぞれの特徴について、なぜ、それが人々に「国際児童年」について考えさせるのかを説明しなさい。(それぞれの特徴ごとに3行分)

評定はタイプで観点は一つだけ。「3」は3つの特徴を確認し、それらの特徴が人々にフェスティバルについて考え支える理由を説明しているもの、「2」はそれらの特徴を三つ以下しか確認できず説明もあつたりなかったりするもの、「1」は特徴について一つも確認できないものとされる。

データ作成 監督者は制作された立体モデルを45度斜め上から4つの角度で写真に撮っておく。

8. 三つのブロックの検討を通して

三つのブロックとも、文章で解答する設問が多く、生徒は限られた時間の中で駆け足での解答を迫られると想像される。特に第4学年の「モニュメント」は、55分の中で作品を鑑賞し文章を書き、与えられた条件を満たすようなアイデアのスケッチをし、それをもとに厚紙や粘土を使って立体モデルを制作し、さらに自分の制作したものについて自己評価の文章を書くという作業が音声テープの指示にもとに連続するものである。第4学年の「タイムカプセル」は、言葉によらないビジュアル・コミュニケーションの意味を体験的に

理解し、その知見を応用するという点ではよくできた問題であるが、設問9の活動など、やはり30分の中でどれだけできるかが再検討が必要であろう。

また、個々の設問が求める活動レベルは、「実施要項」では3段階で想定され、それに基づいて作問したとされるが、多くの生徒にとってかなり難度が高いレベルであると推測される。

9. 今後の課題

今後の課題は二つある。一つは、この“Arts Report Card”報告に対するアメリカ国内の反応を確認することである。もう一つは、わが国での図工・美術科での評価方法の改善の糧とすることである。

アメリカの代表的な美術教育研究誌でも、この“Arts Report Card”特集号が出され、ダイキット(Diket)などが、創作と反応との得点には相関性がある、設備の整った学校の生徒の成績は高いなどの分析をしている。¹⁹ 一方で、行政サイドからのトップダウンのやり方を批判して、ポートフォリオなども含めた独自のアセスメントも提案されている。²⁰ 芸術教科に関しては、2008年に新しい「実施要項(framework)」に基づく調査が計画されているが、1997年に本実施された経験や反省がどのように反映されているのか、第4、第8学年も本実施されるのかなどを確認していく必要がある。

わが国の場合、国語科と算数・数学科に関して2007年に全国学力調査が実施される予定である。アメリカでの調査の目的は、全体の学力を底上げするためであった。生徒は問題の一部(美術教科で言えば一つのブロック)を受けるだけで、個人の成績は出ないが、地域別、男女別、人種・民族別(白人、黒人、ヒスパニック、アジア系)、両親の学歴別、住居地域別(大都市郊外、小都市、田園地帯など)の統計結果が示される。教育が必要な子ども達は誰かを探り、そこに重点的に投資をするという趣旨であった。しかし、NCBL法(2001)の施行以後、学校間の競争心を高めるための方策としても使われていることも確かである。

わが国では、学力低下論争をうけてのデータ収集のための実態調査という名目であるが、学校間の競争をあおるものにならないような配慮が必要である。

日米に共通する課題は経費である。アメリカでも第8学年の美術教育調査の対象は結局、2,999人であった。単純にブロック数の7で割れば、1ブロック400人強であり、全米規模として多いとは言えない。それは財政上の理由と推測できる。第4学年の「モニュメント」の事例では、かなりの材料が必要である。パフォーマンスを測ろうとする限りは、制作活動とそのための材料は欠かせない。経費面から、安易な「紙と鉛筆」のテストになってしまう場合もある。

また、既に指摘したが、アメリカの学校では、ディ

スカッションやディベートといった、言葉で自分の気持ちを説明したり、アイデアを述べたりする機会が日本の学校よりも多い。日本でNAEP方式の言語説明を頻繁に要求するテストをしたら生徒のとまどいも大きく、成績も低くなることが予想される。言語表現によらない鑑賞（反応）活動を評価するための設問を、特に小学生などに対して、どのように工夫していくかが、わが国では強く求められてくると思う。

注

- 1 全国的な学力調査の実施方法等に関する専門家検討会議（第12回）配布資料 2006年4月20日（木）配付資料。http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/031/shiryo/
- 2 「アセスメント（assessment）」を「評価」とするとevaluationの訳語と混同されるが、内容的には「評価」も「アセスメント」も重なる部分が多い。データ収集の過程のその結果の解釈・評価の両方を含む使われ方をしている。広い意味での調査では、学力「調査」とし、データの解釈・評価に焦点化される場合には「評価」とし、両者が分かちがたい場合には「アセスメント」を使う。
- 3 この間の動向に関しては、本間政雄・高橋誠編著、諸外国の教育改革 - 世界の教育潮流を読む - , ぎょうせい, 2000, の「アメリカ合衆国」の項目が要領良くまとめている。
- 4 「美術」という名称に相当するのは、全米基準やNAEPの調査でも使われている“Visual Arts”である。州によっては、“Art”, “Fine Arts”, “Art and Design”などの場合もある。
- 5 Standardsを「基準」と訳したが、学習指導要領の「基準性」との関連などもあり、「スタンダード」とするほうが誤解を招かない点ではよいかもしれない。筆者も参加している国立教育政策研究所のアメリカ班でも議論されているところであり、「スタンダード」とする方向が示されるかもしれないが、ここでは「基準」と訳す。
- 6 恒吉 僚子, 公教育におけるハイ・ステークス (high-stakes) な教育改革, 教育学研究, 67 (4), 日本教育学会, 2000, pp. 417-426
- 7 ふじえ みつる, 全米美術教育基準の成立とその課題について, 美術教育学, 25, 美術科教育学会, 2004, pp. 383-397. 美術教育基準は他の音楽, ダンス, 演劇分野と共通の構成をもっていて, 内容基準に知識・技能, 達成基準にそれを使いこなす能力 (コンピテンシー) を設定している点でも共通点がある。
- 8 ふじえ みつる, 全米美術教育評価の考え方と実際そして今後の課題, 大学美術教育学会誌, 37, 大学美術教育学会, 2005, pp. 367-374
- 9 NAEPは, National Assessment of Educational Progress の略。The NAEP 1997 Arts Report Card, NCES 1999 - 485は教育省のサイトからダウンロードできる。筆者の依頼に応じて送られてきたCD-ROMは2枚組で, 1枚 (CD- 1) は, 1997年に実施された第8学年の問題と採点基準とその成績について, もう一枚 (CD- 2) は, 1995年の試験調査された第4学年と1997年に試験調査された第12学年の問題と採点基準が紹介されている。第4学年の事例をそこからの引用である。(http://www.naces.ed.gov/nationasreportcard/arts)
- 10 このフレームワーク (実施要項) は, NAGB (National Assessment Governing Board) と NAEP で検討されたもので, 調査の対象となる学年, 領域, 想定される到達水準 (Preliminary Achievement Level), 実施期間や時間などを提示している。
- 11 上記, CD- 2 の序文を参照。
- 12 アメリカの美術教育に関する全米基準や各州レベルでの資料は教育省や州政府のサイトに掲載されている。全米基準と州の基準については, 国立教育政策研究所『図画工作・美術科のカリキュラム改善に関する研究 - 諸外国の動向 - 』(2003年10月) を参照。また, ふじえ, アメリカの16州の「美術教育基準」にみられるDBAEとの関連性について, 愛知教育大学研究報告, 第53輯 (教育科学編), 2004年, pp. 147 ~ 155を参照。
- 13 ふじえ みつる, 全米美術教育評価の考え方と実際そして今後の課題, 大学美術教育学会誌, 37, 大学美術教育学会, 2005, pp. 367-374
- 14 1997年に本調査された第8学年の事例では, 集計結果は示されているが, 具体的な実施の方法や時間については触れているものが少ないので正確にはわからない。フレームワーク (実施要項) では, 時間の目安として, 第4学年では60分を限度に, 第8, 第12学年では60 ~ 90分などと提示している。
- 15 「3」の解答例として, “ One characteristics of charcoal is that by changing the accent of pressure as the charcoal you can change the lightness or darkness of your lines. ” をあげ, この生徒は, コルヴィッツの作品を見て, 作家が実際に木炭を使いこなしていることを自分の言葉で表明することができるとしている。
- 16 「3」の解答例として “ Kollwitz drew her head and hand very carefully. She shaded them to show depth, and she drew in small details. Her arm is drawn haphazardly. She didn't shade it, or drawn much of an outline to it. ” があげられている。
- 17 生徒がメモを取るための指示は「あなたは自画像Bの作家が伝えようとしてきたことについて短いエッセイを書くために以下のようにメモします」とされ観点が示される。
・作家が身体の部分, 顔, 顔の造作, 頭, 首, 肩などを描く方法,
・作家がその自画像において, どのようにして, さまざまな種類の線を使っているか,
・作家がその自画像において, どのように色彩を使っているか,
・あなたのメモは採点されませんが, エッセイ書くために利用して下さい。」
- 18 注9を参照。
- 19 Diket, Read M. et al.; Taking another look: Secondary analysis of the NAEP Report Card in the Visual Arts. *Studies in Art Education*, 41 (3), 2000, Pp. 202-207 .
- 20 Dorn, Charles M., Madeja, Stanley S., Sabol, F. Robert; *Assessing Expressing Learning; A Practical guide for teacher-directed authentic assessment in K-12 visual arts education*, Lawrence Erlbaum Associates Publishers, 2004

付記

この論文は科学研究費 (基盤研究 C) 「日米の比較を通じた図画工作・美術科における『学力』の研究」(課題番号 16530579) の研究成果の一部である。

(平成18年9月19日受理)